

2014年2月5日

(第3種郵便物認可)

日本農民新聞

鳴谷栄一の 異見私見



のところ仕事の関係も含めて30代の若者と接觸する機会が増えてきている。そうした中に大企業を辞めて自ら起業しているもののが少ないう。アンチ細川の人たちと話をしている時代、正社員になることその多くは本当のことども原発は好ましく置かれていたから、彼らは大企業からの高貴脱原発でいたいが、金や雇用の安定にはさむつた大人の考え方であるようにも見える。しかしながら問題は未来世代に対する責任を優先するのか、未来世代へレンジを繰り返し活動領域を広げてもいいの。彼らが起業した理由としてあげるのは、大企業ではパッシブ品として扱われるだけで専門性は獲得できてもそこでの自己実現は難しい、ということである。まさに本音に素直になって立ち上がりたるもので、彼らは小さなからこそいいこう世界があることをしっかりと見据えている。

この責任は構図が浮かび勝負するのではなく、大きな世界で自立・共生していく農業、地域農業こそが方向性ではないか。日本農業は地盤農業の複合体であるから、経済としていくのか、経済という観念に囚われず、腰に据えるべき時である。(農的社會デザイン研究所代表)

ううのが主なる理由であ

る。勿論、小泉元総理とタッグを組んで脱原発を明確にした細川候補が当選できるかどうかが焦点である。細川氏も小泉氏も、大震災とこれによる福島第一原発の事故が発生するまで原発の安全性とコストについて信じて疑わなかつたそだが、福島第一原発の事故が発生し、その後チエルノブイリに足を運び、スリーマイル島で事故を調べ、スウェーデンで核廃棄物処理の現場を見るにつけ、これではいけない、抜本的に考え直さなければならぬないと思つようになつた旨を、選挙戦の第一声で述べている。経渓も大切ではあるが、未来世代の存続そのためを齎しかねないものにふたをかぶせたままで隣居を浜め込んでいるわけにはいかない、何かできることをやらなければこの発言をして行動には拍手喝采である。

一方で細川候補に対する反対も強いことも確かである。理想ばかり言つても、経済がまわらなくなつたらどうしようもない、じつういうのが主なる理由であ

る。2月9日に投票される東京都知事選の結果がきわめて注目される。勿論、小泉元総理とタッグを組んで脱原発を明確にした細川候補が当選できるかどうかが焦点である。細川氏も小泉氏も、大震災とこれによる福島第一原発の事故が発生するまで原発の事故が発生する

小さな世界と本音